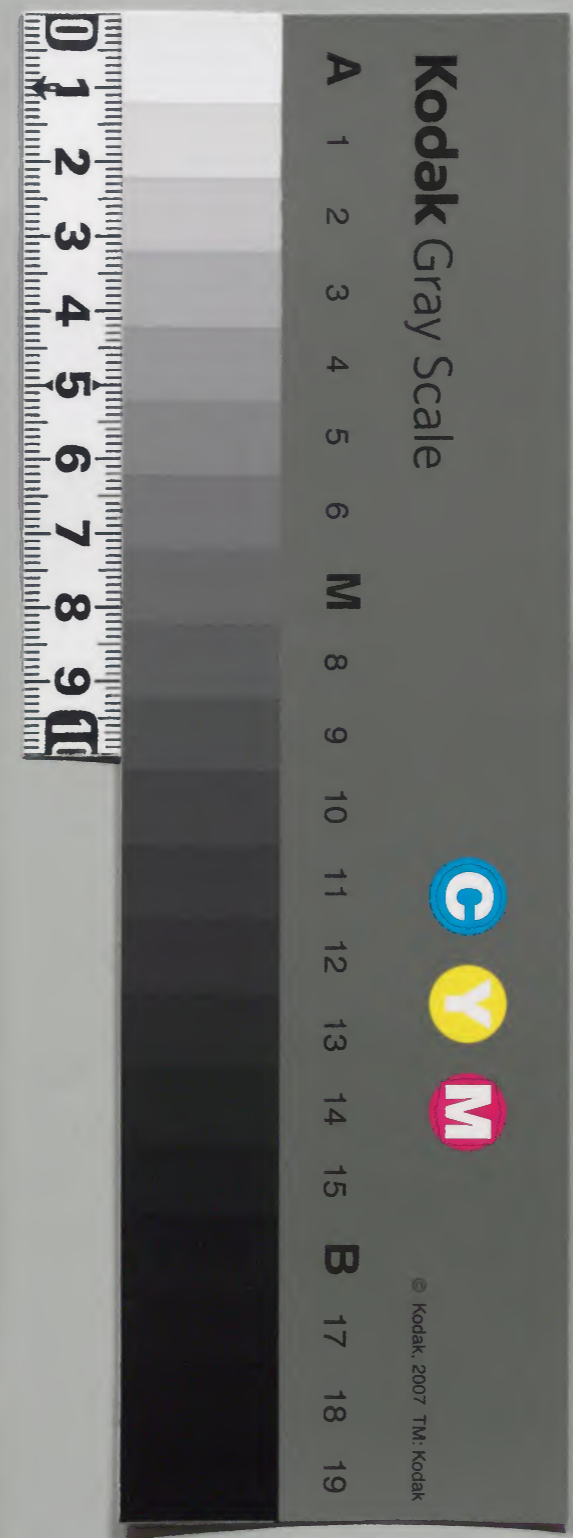


和書門類

和書門類			
一七〇二	一七〇二	一七〇二	一七〇二
函	架	冊	冊
三	三	一	二

內閣文庫			
一七〇二	一七〇二	一七〇二	一七〇二
冊	冊	冊	冊
二	二	二	二
架	架	架	架

內閣文庫			
番號	和 17702		
冊數	20 (10)		
函號	203	24	





源氏物語

抄卷第十庫

紅學講談所

目錄

とこぢろ

あつて

野分

佐田

有ろう

志本



為友 並田

以訓并弄シテ也 堅並シテ

松子トコナシ 康爰一物二名トコナシや 源氏世六女六月之予也

つり殿 ちんねや乃ひるま

系中名池記 釣殿院号ツリノ六条院考天皇乃伊予六条系

洞院トウよりあり今相経よりくはる六條院の釣殿六条系キョウ

各別カクの亦也

又うのわの相切ツクころよはむ他タふ事あり是名に詳ツキ

下略之 釣殿ツリノありつき日人くまみみて魚イサやとてう

志シしる事コト而新ニおけり

中おの系 夕霧

西川 榎川 禁河キンガと云 禁野キンノと云ハ涉物シヤモノのため禁

Faint bleed-through text and a large red square seal impression from the reverse side of the page.

すうねお交野をいへり

ちりさ海 登坂川北事也

うみかろふゆつ里れ中 とりあへぬ魚もこらせ
て川あゆ一終え入一こおるぶしこお入一うわ
まきれとうへあきてれとくはたへうへうへう
せきせ海てあうして海いおとあり

大敵の恙くら 夕を尋てなり

ひまづりて お水 ひをくればあなり

枕双綾よ 藤の国もわらくお水おを城ひうてきて

さうとくと云こ

云子洞氷水佳人書藕絲 松子 納涼符也

すいそん 下飯などの歌也 水漬たつもせあり水飯今

のせうひめと云てくふ指なり 如湯漬

あうどれ 早速 ひくめくむなり

いろうそくさむむなりし

せみの群 何れきものさま 何うしり音あり

水乃上むく 多をすく 事海から 今日と黒い

なり せ海 源詞

ひらひ せ礼

あうひなやも びのうくをあはむはあてあて

まけへ 東波

れよひひら 源北老くやうとそよその事もまけ

あはれなる心

めいしうきいしと 也巻雜ともなり

以てきしうしうや 源詞

を江志のすしとひらけり

弁のぬお 柏末の牙

うのまのほほひまうしり 後のすし巻末おきあふにハ

春とつりり 春身流ひしと可ひた

近江志母ぬおとまなり

あつしうきいしと ぬおのこらふ心なる

あつねともむしうしりぬおのあつねぬおとせうし

うき巻のぬ

中ぬ乃ありむ 柏なり

あれどひ 觸也 縁うぬまふひれ

けそん 家損 家のうむすおとま

おかつんめら ぬ子多なり

あつねのうきいし 兄弟うしぬおのむなり

あつねのうきいし 独離てぬおの友よとくぬおのあつね

あつねのうきいし 極分ひれうしとくぬおのあつね

あつねのうきいし

あつねのうきいし 源ハぬ子をくぬおとなり

あつねのうきいし 源を物うしあつねぬおのあつね

あつねのうきいし 源を志 定てあつねぬおのあつね

あはれなき人なり

あはれなき人なり 一向の神もよむとて

あはれなき人なり

あはれなき人なり 附日なやれむとて

あはれなき人なり 中なる 同業なり

あはれなき人なり

あはれなき人なり

あはれなき人なり

あはれなき人なり 入るにありて

あはれなき人なり 女房の言はなるゆへ

あはれなき人なり 外様もよむとて

あはれなき人なり

あはれなき人なり

あはれなき人なり 海の内を親のふとて

あはれなき人なり 世よふゆへに

あはれなき人なり

あはれなき人なり

あはれなき人なり 玉のまきまを

あはれなき人なり 玉鬘芳しく

あはれなき人なり

あはれなき人なり

あはれなき人なり

らぶらぶ 世よよとれらる人ばえん 玉のちしめく
しちのりなり

おの中お 拍うううの中よも別て可説となり

中將の志ハ 父るを

中お城のしひ 父也 おと源との相経なり

まーとをなごうううーのあう 歴なるあうの

不見れまーらぬじや

おがさささ 父孝を玉源也 すらよと句ういなり

頼字 みごてもる元孫とるを 志むさまーのもな

ハおがさささのしと女おとれがーのて父孝よさ

しちのりなり

まごささとらふ人も 玉の如きおのさまたくとも

つとてなり

我家をとりの帳ともいれたら城おが志むさまをじこよ

せんみあのなれ何よもんあまひあごかの後よりん

信守 呂 我家乃系

もてしとをささへん 今更にこくーくさおまーの

あふにまのせ 隙ーの往を終るくとなり

あまのし家内心の 玉れはるー思ひあ入り

あふにまのせ 志むら

あふにまのせ 志むら

甲子よ 夏也 新琴 林系と 信馬 樂げりりよあふの

昔の物よりあはせけるはしん今を絶るを禱ふをあら
二席乃^{セキ}所^トほ^シま^シ今^イれ^ラん^ハある^トなり

思ひれとー 心を聖とむおのち^チをぬとこ^トなり^テ行^キなり
しこ^シわ^クう^ウの^ハあ^ハて^テ月^{ツキ}は^トれ^バお^シ端^ハち^ヨく^クし^テま^シ

こ^シく^シれ^テる^ハ女^メ又^マ弦^シ 和^ワ琴^シ六^シ弦^シ
こ^シの^ハよ^ク 和^ワ琴^シ乃^シる^ハなり

ひろくことくまの 女^メれ^バ用^ヨお^シこ^シれ^バ物^{モノ}なり^シ
他^タ國^{クニ}と^シ不^フ家^カを^シ女^メなり
ま^シの^ハよ^クお^シ 禱^{カク}ふ^ハを^シあり^シ今^イを^シ禱^{カク}樂^{ラク}と^シ信^{サイ}ず^ラる^ハなり^シ外^{ソト}を^シお

琴のたがり

そ^シが^シき^シう^ウと^シは^シす^シ也^ヤ 前^マは^シ注^チ

但^タ物^{モノ}を^シ引^ヒて^シ笛^{フエ}や^ハの^ハ音^ネと^シり^ハお^シと^シの^ハし

わ^ハろ^ク 琴^シ乃^シ操^{サウ}弄^{リウ}と^シひ^シて^シなり

い^ハう^ウと^シね^シぬ^シす 玉^{タマ}又^マと^シ思^シひ^シ也^ヤ 咲^{サキ}

あ^ハの^ハか^シい^シま^シく 玉^{タマ}う^ウの^ハ詞^シ

あ^ハの^ハう^ウな^ハも ひ^ヒげ^ゲを^シ女^メ物^{モノ}と^シなり^シひ^シや^ハ玉^{タマ}の

乃^ハ婦^メなり

あ^ハう^ウし 源^{ゲン}詞^シ の^ハ中^{ナカ}ひ^シら^ハな^ハん^ハや^ハも^シ也^ヤ

物^{モノ}の^ハけ^シき 和^ワ琴^シを^シ伊^イ弉^サ伊^イ弉^サ無^ムの^ハ二^ニ禱^{カク}乃^ハ所^ト代^{ダイ}り

お^ハさい^ハは^ハう^ウの^ハと^シく^シとも^シ日^{ニッ}本^{ポン}紀^キな^ハや^ハる^ハき

みしす夫乃志ガ小天喧太非れこもり流津暮りりつて
 美しうともいりり 寢初まき六張と双て修らばうらね
 らあうらと和琴と云物を造りしと也今乃せり巫
 のによするともしちのけらうらそあうらりりれこ
 りるよやふんしのつらとハ男の官とし圖書家と云女
 能とそあ目と云和琴とあ目代女友あつありやりがり
 ぬきぬたるしと云又持月或を宇多流神なと和琴ぬ
 物也我あよりむさこけら黒かりにりてりつれの樂
 器よりそよよとけり事とあまりられふよりきと
 物のおややするともらへまじ罰を内れれと云乃琴の
 上はなるるしと云とそりへおなり

れれやー 美まれれやーりの別けと住居るる
 ておし事すけやー上よまを惜りや
 ほどゆびまびうしとけいひとみかく イヤ
 へうのくしと染と也 花よ委る云行やも平云ととて
 へく成南流り用也
 ぬま川ぬま河のせくれやうらとせをけりのおわり
 救まがくてれやあうら流す片一俊信馬樂 下略
 やりうたととせ抱られ世曲と何町ハよまてうらふるる
 奇めく
 れやさくらハ源の肉とゆきてるうらゆめと又源と云の
 れ毎れやうらめられまてとせ流ふとあ家流

源乃あうらわらひてや心をこめ紗衣^{サウイ}も
あうぶまん 唐の書よを相^{サウフシ}夫^フ憐^{レン}あくまを^{サウフシ}お^フ夫^フ志^シとお心
を同^{ドウ}死^シたるとは思^{オモ}とよ海^{ウミ}流^{リウ}くによりてなり女^メハも心
してひくへしといあり

おもたなくて ちつりのそともとま

志^シり^リも^モひ^ヒふ 源^{ゲン}不^フ引^キ引^キ人^ニと 玉^{タマ}此^{コノ}種^{シユ}

つうなる風^{フウ}乃^ノ 面白^{オモシロ}詞^シと也 玉^{タマ}親^{チカ}

みそ物^{モノ}さう^{サウ}ぬ 源^{ゲン}地^チ卷^{マキ}人^ニの^ノこ^コと^トき^キい^イあ^アふ^フ人^ニを^ヲ娶^{ムス}を

た^タし^シん^ンと^ト玉^{タマ}の^ノつ^ツれ^レが^ガ死^シ滅^{メイ}會^ケて^テなり

いと心^{ココロ}や^ヤま^マい^イ 今^{イマ}あ^アき^キ思^{オモ}は^ハる^ル也

世^セと^トは^ハひ^ヒる^ル夫^フ 玉^{タマ}此^{コノ}事^{コト}と^ト内^{ウチ}へ^ヘ種^{シユ}流^{リウ}な^ナり

然^{シカ}も^モ人^ニも^モ不^フ定^{テイ}世^セ界^{カイ}も^モや

つあ^ツへ^ヘを^ヲ 木^キと^ト玉^{タマ}卷^{マキ}よ^ヨう^ウと^トあ^アひ^ヒり^リなり

於^オて^テの^ノ言^{コト} 野^ノ之^ノ言^{コト}合^カ判^{パン}言^{コト} 唯^{タリ}

林^{リン}も^モ於^オと^ト打^ウつ^ツの^ノ一^{イチ}き^キ花^ハの^ノ文^{モン}流^{リウ}う^ウう^ウひ^ヒと^トけ^ケる^ルあり

も^モう^ウま^マに 山^{ヤマ}う^ウつ^ツ乃^ノう^ウま^マの^ノ身^ミの^ノ心^{シン}な^ナる^ルし^シの^ノと^トれ

り^リえ^エね^ネと^トを^ヲ玉^{タマ}と^ト内^{ウチ}へ^ヘと^トく^クら^ラい^イ夕^カ報^{ホウ}の^ノ玉^{タマ}た^タみ^ミね^ネた

ま^マよ^ヨへ^ヘを^ヲと^トなり

あ^アの^ノ子^コれ^レ夕^カ鳥^{トウ}乃^ノ上^ノ尋^ズる^ルふ^フお^オま^マの^ノま^マつ^ツり^リさ^サう^ウと

は^ハね^ネと^トう^ウれ^レく^クなり

海^{ウミ}ゆ^ユと^トま^マり 操^{サウ}子^シ乃^ノま^マの^ノこ^コと^トり^リあ^アる^ルと^トあ^アく^クふ^フあ^アめ^メて^テと^トま^マり

あ^アの^ノゆ^ユへ^ヘも^モや た^タら^ラち^チ福^{フク}の^ノ親^{チカ}れ^レう^ウま^マの^ノ玉^{タマ}ゆ^ユと^トま^マり

つよせくもあつういもあつうすて 又うろたへん終
たぬ波心くろくまきなり

山阿の旁 玉乃心よとせれの糸糸まて為もたけり
只此對面^{タイ}まなと也 母乃事と下句とを早下^{ヒダ}してい
一糸力の母まてととる

こゆくまうりし 引きたるまきなりくあくるこゆくま
つしなり

されへみ 久く乃次とてれぬ又なり
おそくあひなき 玉とあるこへじのを終り
や一まきとなり

春乃入 玉と我りのけりても業上げこくをねがも

こゝとる

さてそのれとり 慧うり下れおそくまきとやいり
人よりとばれ 源乃心少くとも玉ハ故くに
あまは世上のねがををとらんとかり

細々の 二つれ二ひるまより源乃心おれも
をとらんとかり

つさかひらりて あなたへ引とるまきと又
こなきを^登をてん終りとやのふりひなきおゆ
しをてんのとねのひてもとむたてあれとわ

を心得りぬ
さしるんや 旬まきつうひかたなり

うしろめな兒 玉も源乃ちつとてあをく〜とてゆりて
あきとやうく思はせたり

あを けりはるを
あきぬく〜 あきぬびこ〜とてまてとせ

ま〜せるれぬ 玉れ世とあはれをいへ〜とて〜
絶とたり

とれつ〜因守 雲ちのよ〜とて〜れととせ
ゆとれ〜紀美奏乃好交なくととよわねとてじ〜

す〜て思ひみしハととと
たのひ入る〜 筑波山い山之け〜けなれとせひ入
〜とと〜り〜とと〜たり

〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と

あまのそめがきあつた せうの事りく源氏のうつり

ひびくし内大乃ねがえとくれしとあうまんなり

ゆきをくともなれ 玉き可徳とやしむし

りてうれき 内大の詞

んくくあねあつた 今まそあまそとてうし

あまのけさ 世上の人りのけさあまのけさ

たろあまのえ

ねもくしとまはしふ 雲の殿にけさとあまのけさ

あまのけさ 雲の殿にけさとあまのけさ

今ひめ 雲の殿

とらのけさの 雲の殿の子を玉きあつた

えつらん きやうさくうあくとよむし

あまのけさ 雲の殿と 雲の殿と

かきひめ 雲の殿

位あまのけさ 雲の殿のけさとあまのけさ

くちのけさのけさ 雲の殿のけさとあまのけさ

さんとなり

のけさのけさ 雲の殿へ

うしとねき いまあまのけさ

たろちの親のけさ 雲の殿のけさとあまのけさ

あそありけさ

んくもちく 雲の殿のけさ

心やとく 打ちて

カサコめて 見字もこのりる 密因ヒツインにして也

ゆとう 舟なるむくやうに してせとて ころもしく

しととや 陀羅尼タラニと 形をむす 舟のしとと

みれとるがうへし

荒園を尋 ぎ仁心 志海をいつく してとるれとて人

乃カウチカヤとて ちむたより ちかたかきと 密

るもちて となり

う所乃 つけもたらあの人ふと云ひぬ

ちんたつ子 的る船志也

しとく ちゆへを 船舟よき船とて ち

ちゆめく ちもなくと ちゆがりやん 舟ゆくと ちゆめ

あふさも 源乃うま ちなり

たて ちひをて ちのひ ちゆり 舟ゆへ ちゆめ

らの悉乃人と 的る船志也

ちのゆやうに ち舟 ちつり 舟乃事なり

ちんたつ子 ちれ試シとて 舟とて 舟ゆへ ちゆめ

ちんたつ子 ちゆめ ちなり

ちんたつ子 舟へをのち 舟ゆへ ちゆめ ちなり

ちんたつ子 ねまこと 舟ゆへ ちゆめ ちなり

ちんたつ子 舟ゆへ ちゆめ ちなり

ひりゝるなふ事ゝとも 雲井れ心申

申しくさうけりこそ 夕と暮とのあもひは内なる

訪ひてつひあをきくゆり合はるのしきとなり

たまふりも 雲の事ゝ乃ゆへり

あのおれたい 遊江志

如夢 ありてん

あれたらの あなつりくさとのあひなり

ゆとさりのあほうりまわ 秋^{カキ}のあま秋ハ可^{カキ}とや

老あへん 年^{カキ}と女^{カキ}存^{カキ}たに呉^{カキ}んさせ紗へともさ

なやういとさこと乃 女^{カキ}詞^{カキ}は外^{カキ}ありあう一也や

申おぬとの 拍^{カキ}おぬのひてこしくはは

—にお遠とそとや たへさを 不^{カキ}定とてうや

うさもあややういよや あたふとらあはるはこよ

まそ遊江志をひりゆるとるこ

あややういよや ことく—あひの不^{カキ}静^{カキ}あり

これあありあ 女^{カキ}あれた秋とつり

梅花の初^{カキ}朗^{カキ}乃^{カキ}振^{カキ}となり

すまふら 赤^{カキ}いふら孫^{カキ}也

りくそを紗へあ まかひのひとかとえび梅の花とて我

もれあ—とねてなりむま

申おぬのあ—さうへと 嫡^{カキ}子^{カキ}まくれとぬく—たう

あうへとむりのさととあ詞^{カキ}あり 拍^{カキ}おぬを—てあや

あふとかり

すふれたゆくけりちのなるてのかり

みせち 誰ともなり

せうさつく 勝さく又小月のあひてのるれを小月也

吉がに シタナキ 吉利

えとあともてのま 北軍してをささあし

沸るるやくく めれくをー球ふむなり

大月をとえくやあひてれ ゴサツ 節の折れ

とうとひねる 今世のつをえくさううや

中ふ ささまうーれ中ふーれのひをあけりうら

びるこのあくもあさくれ

あさきま あられささむの

むちりうふ 去後へちりれむえ 又ひつれひきむ

もあさく

つものろげ けさのろき人をあつちますくれたらとま

ひやさくつともなれとまむなり

うしみる 肉のほむよわり カキ 形を思ふ合て目の沸きく

せと親ーゆり

あけて相し 初ハはそきあひーあ今詞をうけゆり

てうさぬ 双ふれるるよまおきり けよむにちあく

地下のカスーちあくつうふ人るまとなり

あてのぬりうまうらぶ あてのぬき セシ ぬきり不反

しそくものるれとたり

まいてのりら娘おとくてたり

何うきことくくしと 延の詞

わのこ 大壺 延の式 延の式 大壺一合と云ふ

今茶小使はく乃事一の字を御とよむ

あうぜん 考ごぜんの心あつた

れごめい 吾実人となる

吾のの上 吾乃ぬびをばつとたり

めうほうし ぬはる 在江別

たうびーぬひーや 大徳うふをよありけらにあらや

しととるら けうやうハ母れけうとわのひあをうれ

一も徳考養乃ひまーのきとや 大徳へおとてと

大徳と考養中の可法ぬ 考中ぬお遠お也

とくそのつんれむくみ あんきのと徳中ま之

大徳ト一何やうとらるものとたり

為得る人 聾盲瘡症 誇斯経 獲此曲也 法華

大徳と 大徳

こふくく内大乃所心 法子れう 女法をうり

あてもまぬへし 一人おならまはよく成心の

水張くそたきし

揚婆系云 抹菓波 揚新設食 法花經とりの

そしこしハ新なるなるも水くみけりるをそそし
め人揚るすは神のあくるるさる曲事と云はれ也

れあごとほしれるるふなり

よみしれ日りりき但撰日不及也

おみろき肉乃虫れ力ちろさおも回位又位位がと也

をいりああそれをする 遊江の又もさごとくく

て不似相と云ふ又最の短

まのれ若 又節成さしてとは討なり

ろかれん

とひるひきより短の家子批判をり

しなる事なるぬと討うろくをいれを面白

まや同叙理を繕尺よりよりくぬめ

群づのひ おなをにらりてすよまなり

討だひて 討迄

ひとりのひ あつとをけりきうとある

こをあかせ 志ふくおれあめあしあくと也

よきまうてん やくくすつしとかり

れとらも下よ 矢下一よをはあをぶるた兄弟弟小悪

思されてはとや下女討かとも兒らまたたりきんやひ

ありのあの人志まぬあひをぬりと若塩れまりのなれ

よきあのの

うけあひけりり 志すくもあつりの道たれと誰れ

その図をすへん

ちりねも ちりねを我野とつてこのこねぬ

やそくきさ乃ゆへ

てんりお 筆遊ヒツヂや 又乃うらま

いやくうー にくらのこます田の比乃振芳乃いよふ

きゆる揃うそまき

水登洲川 あーきとたぐい海にせ河を乃

みまののうすかろねも

ちりね事とちりねうー 江系もあすうそや

草のこ 江系乃 せ心シココ一神やひちの海れ

うしーたらの浦波乃をいんそくへ心計の

後河なる田子乃浦波とぬ日ハあまをきとぬ日

そがー 如計計いーや

れが川水 三野の大川 けへ乃者みなのなとにやも

うー我志めやそ のへ水よ乃の包うらや

ちりねのい ちりねの回ひねまへよ如庄筆遊ヒツヂれ点

ちり長くとーれらびりくれもてんハあさし

荒きよ委くびとと也筆遊あさし

ゆへそめり ちりくちり海さうりーのまら

ひとまー 下ゲスラキ如女の役也是を町チヤ直仕シヤ合を可カ強とさる

ちり乃りハ ちりよ来さちり也 船名中のまきあり

里みーらゆいよや 如改は同本なりやあーんとなり

無火 並ナヒ又

詞ウタ 并ナヒ方カタ為ナリ春ハル必カナラ源ヒコ世ヨ六ム文フミ秋アキの初ハジメれ事コトなり

おのゝの 肉ニク也

おとまりの ろとほり乃ノ心ココロなり

あしとよてりーのころあしとよてもの

のめりー 羨ウラヤムあしとよてり乃ノ心ココロなり

人ヒトみのまーくこの首ウラをシや世ヨ上ノ画エ事コトをシ成スる

なまは源ヒコ意イなりこのくまをいぬす女メ涉シへあつり

あふるすなと曲マギ事コトなりや人ヒトみるまにそのおノ心ココロなり

やうとほりりれるすまゝあしとよてなり

あしとよてりやとあしとよてりも句

おのゝ心ココロ也 乃ノ親カタがれやものなり

あしとよ 源ヒコと肉ニクとの心ココロなり

にくれた心ココロを 源ヒコの好ヨクまなり

あしとよの心ココロ 源ヒコれあしとよ又マタ乃ノ心ココロなり

るし

せころあしとよ 初ハジメの心ココロなりあしとよを我オレせあしとよ

のうらうらひ

あしとよ 初ハジメ也

あしとよの心ココロ 夕ユフ月ツキあしとよの心ココロなり

あしとよの心ココロ 乃ノ心ココロ 又マタ源ヒコ也

あしとよの心ココロ 乃ノ心ココロ 又マタ源ヒコ也

源ヒコ世ヨ六ム

お遊 雑とまなり

やま水のがたり ぬるる火をぬきあがりて 燃事火
とやうく水も沸きんきくくくくゆらなり

うらまろ しくまふ打入しくともすぬか付ゆるわねや

夏れ月なき ^{サレ}結露の町かきまゝと云ふとくくく

ゆくり火房 源

ゆきふゆきなりとも 夏るれをきいふもゆきあがりて火の

ゆきまを我力下もさうせん 下にもさぬもくく

きとせゆきまを下もさゆらくくくくくくくくく

成用くくくくく 和

ゆきあがりて 玉のあがりくくくくくくくくくくく

あがりてゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

ゆきおとけり

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ゆきゆき 花のあがりて

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆき 拍へたと并ぬる二人なり

風の言 源詞 次詞 盤持云と

ゆきゆき 和琴

源中ぬ 笛とび度を吹かへり

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

和琴

すくひりま ぬり秋也 群々久虫成なりたくとく

寛平法紀 寛平二年 平利世若皇王二世之孫

之身也 而群長殿方初後秋虫嘯成る秋聴曲調宛如松風

之勤殿後夏葉采叶胸前念言与得鳥数千并綾羅衣裳

不及引

心してと句

色いされ乃此りてよ ふうひつはむとつよと酒乃と

て色いけさすうらうあに志のめやも

玉鬘男の事 ともや兄弟建の候出来ふと云むなり

あれを始末も云と文折るなり

をよあしれと 祢のしと心也 雲まく兄弟と既しは

へりてと玉乃ひるはへし

あさおのちうふとや ことぬハ兄弟乃奏とたり

元無ひ 玉と柏の思ひ也

さぬうくもてけ 歌中志のまりなる所なり

各馬相めの登と引て卓文系の心を記しつと云

扱おめのもとのうひけるためとあるなりやと

心を記してと云しやもり

野分 堅並六

源世六歳

以詞為卷名 八月之予也

久草 久とれまらる

くろぎ あのみき 故乃本を思ふくもむさくるとし赤木

也 水唐本

ま乃山 万葉守一海より

撰春山万葉之艶秋山み葉之秋 時察國王山判之

冬こそりむしれんをがのさるるをそとあむありのさ

下略

春秋のあふうひふ 引多之殿

も秋よ思ひ乱てかへりぬようあはくうらむハ

あふくは ぬりおやとむ心也 世よ乃れまらなり

あせんむれきつれ 中夏の又院なる

野分進の九年

杜符云八月秋高風怒號 きてハ高振也墨時を落む

野分とあ出するはあふく一葉の也一紙むのめ

めめされし君今又あまを盡むをばけまは野分に真

とくになひし振うりをれ事一物種家也

世上又天道可重

まてまひれ 中夏をれ秋深く

古今弱恒身 玉のとけてあはら

あぬへら 仕たる心れ又死種とむとくまこれ心也

抄

れわあけり乃 大老よあがふらうらの神をうれ春候
花を風うらまのきし

かあらの 文城野れかあらの水邊をたもも同を待こ
と老城うらまき ともあらの乃搦ともありなりあま
むらうへし せうくの同城をまきとなり

れとくき姫志 的る姫志乃涉りしに源氏治をま時おや
かおあ 夕暮

こあうー しまと 庭打と成るこく子とく
かり上城き海にするよらりておそくく成するの
強もよ字お

ののみまれば 人よあけおしんむらう

お今にのふえ搦乃事うらや

うらあうとのまひる 山搦をりあかり 一重城とま
よふひちりそ のふふかあやうとる

ゆりけーけう とも入もつもむわ 法惟屣

さしゆく城するや木丁なやよとく城のーや
おくみる人 意正とえまこにむらうーとくういむら
のまはふ別のーあくてとなり

西乃治うへ 的るうらなり
ゆらうて 源詞

ものよあして 意へ源何もやうんは法也
たてる前 夕の涉者あるおあうなり

三十三

おのりける 雲と夕つゆのふらふらとけりや
同くそ けりとも 史記云

於此大風候雨お起り木を揚砂る窃冥暗

心ともとらそりて白めりらるる夕れひなり

三条乃まろり 大文此れつていとあま

すつるしゆける 大文より先るとなり

おのりけるゆつりて 大文へ源此れつてけり

三條之と

九条の蓋相造祓記 九此病患目と必可相親為

故障考まの清息可相親本之室否

又此大肉疾雨雷鳴地振水火之變物也之時子宿親次

為

礼記世子之季物曰之云鶏鳴午時也 又王と成王

ぬじと也

れとくけりらる 大文の討 駁る也 此段の事成

三神八句 風翻碧瓦 函類

中へく夕より肉大を 大振るはとけり此れ境入りと

らるるさのやもなり

心よりけて おのり雲と夕と見けりてあまなり

心はる願也

きりりり 雲上雲次とけり

たしる 荒おを形也

人うしれ 女ハ美流加登上と思事をおあそめること
おひひしきさやうなうしん人をうれとよや 花は穢不
加念とも思ひゆるとふさなり

人ころおもひます ねさくのかのめいよあつひのさかた

あり度中ヒキに花おびこ人女ヒキといもんだめは

おひくもくわる 雲霞みよりのなり

おちごうして ねちあひりよとる

まこみのうー まこああぬ心なるし

あさねのあうらん そのととら城りり

いけへふ 花は穢不ヒキは源乃あうまヒキなやなり

ゆるひなれ ぶさくもるふかりとなり

みのー 肉へ一るしつるや今乃世とれよさうしきり

志のさうれさ 文は源へ肉の汚不ヒキのうー花は穢不ヒキ一奉

うらまづつらめ夕乃志のとつらうり源を花は穢不ヒキ

花は穢不ヒキ男くー花は穢不ヒキ

海とにーみて 花は穢不ヒキ切る花とがりの

うらさなりー うらりーよあうし心と人多人とさう

おし花也 花は穢不ヒキ大やうなるの花とがりのし

ねらとあひて 花は穢不ヒキよ同氣おたるとがりの

あうらんにとりーのし 中へ女身なり

志をんはてーこ 何よりあひさう 花は穢不ヒキの文よわうらと

けいさハ内後れ花は穢不ヒキなり

とらぬ魚一雨たてまぬま黄也う崩美

ととよ 誌中回とくうのまよことお 吳本

げ怪不志とみてとくの習え志とよ打と童の装束のま

まや 庭の元の香う 様袖れのちりあひいふる所え

中えの追風もをせまつめとがり

ことぐよとあふ時き遊は装束のかりあひいふると可む

ぬの祖平を候也く

かれむい あくよとをゆるまひね也 瞬

れとろきあかすハ 少くくとをせぬなり

湯煮り乃ほと 夕方の殿上童まくハ肉乃時ひ女着衣

きてせし備心也あうもなむとなり

宰おの志 夕方の私の袖短るるとなり

あまのて 物中えの世上乃袖ねまうま時分の又紫

上ととる中もあす夕のむもぬれとくに思ひれと

一あひひおさいへと中えはひこりまとるや

あうま同せも 肉と源袴乃つらまうまうとや又夕志

てとひ短ふになくゆめたると中え乃は懸家よや

あへくふ やうそうかうまといふ心の

あやしくうへ 源袴をろうのふれりめきんとしてまう

なうくすのうと 源中えへなり

ひみつがくとなる 胸れあこの指指なるの成字よや

中おの 源堂へは給るると

ひれやもろり 人乃親れ心を害よりぬとも子とさふ
道は海よりひわらうれ

道の所のか 双

まろり 中文のそと 源種

きくさけえ さまうたとーあひあうとなり

ひ乃及れ乞^{セヒ}物あひむろりや

ひと親 源の中お録入ておろりますを利^リ根^ニちふやくて

清すいりやうなり

みとれうらよ 中文乃西方なり

あうのそと 源を言を根^ニなる心なり

こうちきさうけうろを引れとてなり

いーかめいなる心なり

あういさあ 村^ニ勝く野分とそりてすてたういさ

あうとせりひあう町分るれをたのこれ入とよや

あうさく けさやのなる心なり

あうこれ形まかりと 玉乃風中もらうこれ度となり

源れ好まそひろりくなりひろり人れよ也

ほうけき 一名 洛^{ラク}神^シ珠^{ジュ} 和名保^ホく^ク新^ニ也

玉乃か不けきけきあやうなり

わりくふ 皇^{ホウ}奏^{ソウ}中もあり 和字にやうなる心なり

あうん 新^ニ也

いしあふやあふ 源乃玉へ地^チ種^{シュ}志^シあふと中^チお^オ新^ニなる

源種

いとむねく一々 あつてはよもいひか
とむねりしれむてうまかぬハハむのむも直也
かりとるま あつてはよもいひか
八重山吹 玉を山吹紫ハハも様をぬくつこもも玉ハ
ゆきなり

ねてふりあそぬ ねるれをなり
花き 俗説うけけふむをりれいふこをり
いぢくあつてんふれ互て 源氏何とをさくもさくもまめ
とらてむふりおぬと夕妻んぬへ
吹みこはき 玉也
せりくも 夕れむこへ玉のまねよふ也

源の吟にすゆなり

下者よ音 源けひまはつりくくも同きふりこ也
かよ竹とひるひらふりてれまぬるも
ひのこみにや 夕のくこをむむなり
まうくもあつてすそ だりの中もあつて
かうひけらく 綿とつけてけけぬり揃り
おつろ 紅のろも縞也 あやなやも
中 将下装の 禁中のは前乃草ぬれ高をあらまき
きほくと歴く 式とるま

けいんせう 花文縞 花乃文よりあつて縞也
謝惠連詩云 客後遠方東送我鴉文縞今日心也 此

とるんと答はるる

おやうの人へ申す 夕よ女房前討とひくれと申す
くたててきの三好女へいせよと申す

又もついでて 一匹を志へ一匹を志てもなり

馬乃すけ 夕秀れぬる

わらせ給とて 的名姫志業とてこころへなり

又ける花乃の不 業ハ橋玉さ山吹夕思ひ給は入り

うと父 業のうすなかり

さそあり夕人さ 業姫志業と夕朝夕思給ふと文事那

源の心とす給ふとかり

とて文 ぬひきて親母れるりや 三糸文 感なりと

や業乃めくつとるゆやうまきかたとる

姫志と 文討 志と也

くちやう 夕よをりて連ゆるのの橋となり

ねむとけき 夕み肉れむとけぬ也

ひうをそ 大文のあくろかり

ゆでう 不調 道は志事也

ひまめとりよありて 肉の娘とりひてはとなり

娘と大文を志給ふれの一候外すめのいよくとかり

とや 何乃巻れもぬひあり 業式新自他たふぬり

かたりむと深く

みゆき 約幸といふるを可事

源世六より翌年二月まで此事の

をよあり 登並るまじり 神音乃撰もちと交丸

天子乃幸行幸 院ハ清言是を天子なれを也 清言を

取ら 幸あつと云家小の字を用

ゆく衆一しつらぬ 玉の清を退となり

このをとり づりけりてつりふよりんをれ山のう

るよりれけりる者なり 此 け言よく叶なり

これとせしやけむとえおひりるなり

のれとも 設仕乃けむを何事をもきしくしめみこ

源の玉をなんといれやおかりめすのひ

もなき 実乃おやとをねし 欠きすハおころり

けしやうおあつり けりれころり けらんとうり

大魚野の約幸 野約幸 仁徳天皇より初り 今乃を延

長六年十二月又日大京野約幸例を撰てあがり

おききよの委賜之 け町知初上 興

すのりより 西米崔也

十

十

十

十

袴をきぬ乃さしぬき玉の帯巻櫻の冠綴を鹿鞞カサ 唐錦タニシ

揚鷹エテと云々 鶯飼シヤウクに装束不シヤウク同シヤウクくシヤウクなり

是より凡 物見車乃揚る所し

うまてー 吹舟シヤウク御人シヤウクとてゆ幸の町志よりて揚シヤウクなり

かくら也 桂川カシガハ小橋とわさきりカシガハ群シヤウク長シヤウク桑シヤウク馬シヤウク後シヤウク浮シヤウク揚シヤウク

方舟為梁其上ニあり板ラ 色シヤウクよて儀シヤウク式シヤウクありり

みりとのあのみ 皇シヤウク上シヤウク赤シヤウク又シヤウクまへシヤウクしシヤウク注シヤウクを

ふつ才シヤウク上シヤウクを赤シヤウク又シヤウクめシヤウクさシヤウクあシヤウクくシヤウク也 源氏今日シヤウク他シヤウクなりシヤウクとシヤウクあ

のろりなりし 群シヤウク長シヤウク今日シヤウクあシヤウク又シヤウク麴シヤウクシヤウクシヤウクなり

ゆきりありし 紋仕のれとくく人シヤウクを 玉シヤウクの心

はあーれ肉 昌泰車中シヤウクとなり

女サラ争シヤウク勝シヤウク天シヤウク執シヤウク或シヤウクはシヤウク才シヤウク或シヤウクはシヤウク高シヤウクなシヤウクと 思シヤウク記シヤウク細シヤウク之シヤウク記シヤウク

ひりひなり 通シヤウクふシヤウクと思シヤウクひシヤウクなシヤウクれシヤウクるシヤウクや

れとく申 将 源と女シヤウク旁シヤウクとなり

日しやうなりとわもひし天子シヤウクの對シヤウクしてはシヤウクさシヤウクをシヤウク何

らぬとなり

お大の 西シヤウク文シヤウク抄シヤウク云シヤウク 云シヤウクつシヤウク如シヤウク例シヤウク源シヤウク府シヤウク又シヤウク如シヤウク例シヤウク

大長シヤウク大シヤウクのシヤウク名シヤウクはシヤウクまシヤウクよシヤウクもシヤウクさシヤウクらシヤウクひシヤウクくシヤウク也シヤウク大シヤウク納シヤウク云シヤウクハシヤウク我シヤウクとシヤウクとシヤウクふ

るを 大長と納シヤウクをシヤウクのシヤウク差シヤウクありシヤウク解シヤウク思シヤウクをシヤウク自シヤウク身シヤウク也シヤウク大シヤウクのシヤウクき

花シヤウクやシヤウクのシヤウクなシヤウクらシヤウクしシヤウクくシヤウクなシヤウクらシヤウクなり 年シヤウクとシヤウクあシヤウクてシヤウクもシヤウク眉シヤウクとシヤウク造シヤウク

なるし

いりくろしほくろひ 舞シヤウクとシヤウク大シヤウクの 世シヤウク余シヤウク

雪のつらさ 仰るは後にも延喜帝^{ニギト}の幸まはぬじ事也
御門の法製^{セキ}

太政大臣 身と別^{クニ}状をり太政大臣もつとも能^シまあらん
こと成はたやういふことうとあはれもん句

まてれとくやよむし

仁和二年 昭^{セウ}憲^{セン}公^{コウ}代例^{ダイレイ}とおろしめをかり源氏もい

時太政大臣 昭^{セウ}憲^{セン}公^{コウ}代例^{ダイレイ}とおろしめをかり源氏もい

いがか山^{ヤマ} 大原^{オホハラ}やうかのみ乃お松りくもやまきり
のれあ代のりけみん

はみ能なるこゆきまわしとやお^キ延とを太政大臣能

ま—ゆふこと城の法^{ホウ}へり お延と法^{ホウ}せういふこと延

るはゆへきふ乃やうか^カなるそあ^ソく^クやななり

その比^ヒほひ 何^{ナニ}もやとあ^アのあ^アく^ク首^{ウタテ}なるや早^{ハヤ}下^ゲさる

の事^{コト}をた^タへし 文^{モン}のるのり

たろきまき^キ— 玉^{タマ}へ源^{ゲン}の文^{モン}を^シるなり

あひなのこや あ^アく^ク— 玉^{タマ}へ源^{ゲン}の文^{モン}を^シるなり

らんそややうく源^{ゲン}代^{ダイ}のむと法^{ホウ}推^シ量^{リヤウ}と玉^{タマ}乃^ノは^ハを^シる

うらきり— あ^アく^ク— 玉^{タマ}へ源^{ゲン}の文^{モン}を^シるなり

のそれうら^{ウラ}ひすのなく 今^{イマ}聚^クあ^アり— 玉^{タマ}乃^ノは^ハを^シる

旁^{ナリ}あ^アり— 玉^{タマ}乃^ノは^ハを^シる

ら^ラ— 玉^{タマ}乃^ノは^ハを^シる

玉^{タマ}乃^ノは^ハを^シる

ねんげつかたあそびく 文つゝの事なるはくしむい
のしとがり

うへをえあふ 意上なり

あのかくしききとれとてはむ回りの事なるはくしむい

あつたうし乃おがも 玉の源乃あそびはくしむいハ内なる

のこたはつしきし中支乃あそびはくしむい

わくあ人の何れを分別つりあまうりたうらんことと

あうしんさる

あなうして 意乃詞

いそろこしき 源詞意のこなり

あのおきす 源

いそあつたうし乃あそびはくしむい

いそあつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

あつたうし乃あそびはくしむい

法を必とあつても所としてハ民非れ所つと免なくても

と也フキヒキ故氏嫡家してれりしまをも春日の非れ所ひり

たひひるん程にとがりし

此井をちくれば子と云事ハ如くれあつたとはかり

かなしく一紀平人しくこれやかと今をうとてと

取酒されとがり

この沸ありゆひ勝ゆむを男スオキエラ女不スオキエラ限的スオキエラの婚悉は秋好是

と内府ダイフ著撰シキ年款シキを之文をも以故を不定勝ゆひを之不

一これやかとふひなり

心ココロのやなく隙スミかれひまを

まもうせマウセみ月の勝カチあつし

わうをれり源ゲン討トウ浄ジヨウ煩バンさサ終シヨウるルまマとトなり

やふり乃ノあろうんン夕セキ霧キ

うらなをウラナ入イるルをヲ禁キン中チュウなり

うぬくウヌクくクよヨふフあアくクあアくクハハれレとトのノ也

たれくタレクしシまマとトろロのノなナらラむムとト

おオ不フけケらラなナぐグとト

年ネン乃ノ所シヨよりリ大ダイ文ブン乃ノ討トウ

ゆユくクまマさんサンとトもモよヨむムし

人ヒトのノうウ人ヒトのノ上ウヘよくヨク知チりリとトなり

りリそソちチ後ゴ世セへヘのノりリなり

されサレしシとト也ヤもモなり

老ラウ志シれレなナらラむムとトなり

つらふく ちまれ伊訶

け年比 源氏嬖孽乃ひあつと年比才及てと也説くを受

け氣可致 大文の詞 源氏のこちうあつる不審と也

年比は存をあるはけるのしとさる

あれやうゆ家と也 文の詞は源回ひ也あつるは

の源へまればはひし事きくしく一とさる

は兼打やも 依^グま言ととてはり又れましなや也

まうちきき 徳^ナ志 伊家礼かとりり

六条のれとく 又まがり

つれなくてれひひしまぬ 夕のひよひぬとせり

人のほとよ まうりなり

あつと句 此心とさし合て後れ知ハとなり

さしをあんと なひまやせまー又やすとせぬ乃

れとくのほひあやにくらと 双比也

あうとく 者徳

あゆまひ 赤^ヒ押なり

あつとぬえ襦の下りさね 直衣 肉に代りなり

夏を縁冬を白あゆのさくら 夏を夏花^{ツク}深 袴^{ホウコ}

尻長 襦^シなりるるる

襦乃下^シ襦 面白くうさひ深なり

さしとのし乃ま 唐^{カラ}綾也 北^キ布袴^ヒ

今やうえあつそ 此の乃まぬ也下襦とさみしと

光りう海をりつる人句 如く志ううりて内府タイフに事するを
大納言をまゝ乃大夫 大それた子内大臣乃弟フトニタナを妻上の
兄弟マヤウタイなり

佐子十人あまると 弁友なりとまて也

物つりお 大文果報クラホツホ志と世上より物経に志しぬと也

西のうーや かんたうのうもんとなり

勤ケツキウと変定する如のんたう也曲セコトなりくと勤カガヒひの

のんたうを 源氏詞 夕と志との事とりのめのーた

可なり

若なり 源詞

たのせうをよびし

たのせうをよびし 心晴ココロハルのむあり

うらなくれわさくことよこせへ向 肉と乃とややく

やれウラミ恨をあらとるを

よひつれ あくをのさほひなり

肉大臣よく天下は急務なることくーさひなるし

ひま志くめ 首セイリヤク懸してとけり

いけへるけふ 源氏詞 乃中よりそまー可なり

世方の徳源河憐愍レシミンなり

たのしくーえ ああまーさまを訓トふるとなり

それ流れてよ 玉のゆくは花知るを

れとく 源氏

なふの 西取乃抽しつるまなり

まゆり人のすふもの内太の位タテり成てるる

くさくさし 逃江悉ぬものなり也

始悉れ治事と 奏上のる

あしにまされ 源れ涉威イナク之

志なく あり衣太文尼までれり ますゆへなり

中おの 夕とまとのるしを不我様

一ゆ 世とを教ナゲり 治ひ一事と一ゆ 無曲思チヨク百一

源乃根とけぬゆへなり

あれと 肉むりし 治ひなり 双地

あふひも治ともふ 二条院へ致仕治能ナモり 乃つらん

連あもとのり

生あしー目 治物後目必来後と治定るる

きふ乃のこまわと肉のたのきくわゆへなり

又ゆりる治 固白と源の肉不様治ひ 又何事一城の

中へくたもるり

あしうてむきよう 玉成源のこまわと治り

れ治ひるなりひゆへなり

をんしとるまわしく 紫の上おとあさる

この治あしと 總サト成て源れ治りるるを治サト成とらうとなり

十六日 治必る日也

あうのる 十六日を撰らるる如く定あるうらあしとふ大

文の氣受可哉りり

むへりりりり 此分の巻よ源乃むへたもかれ計ひし
と夕乃のいふみて思ひ乃外ふひりしと坂乃乃念
てむとたり

うのつれかた 志北のや

かともあらず 一へのち勝しと云むなり

志連くりた 必へ好まむらと一と忘れんふとや

癡字愚シレ ツボカ しくとたりし

採りけしと 志と計ひて又玉にむらさんハとるや

ゆくてその目 此をまの目なり

ゆくとれをこ 櫛ツギ大まよりツギ入り

まことんを 湯冬を

りたくと一と 尻アソをれをかり

るつきためし 念イキかりのきとるや

ゆきとまにまのひて 縁ニヨブをま成結もんとも湯や

ふ次弟とよままの心申のあとうひてなり

二つこのあ 必き三葉文乃ゆ縁源氏のよもこれあ

ひつと二つこのあそと

くくまむくを 玉くけ乃秀白ヒメうらると存の人よあ

の指をまめし へらひしと

唐衣カラコモはく けあひ人秀白とくは白カシラ字と

はとてんゆらさうみとけり

みりあふ カミ 髪あふ乃奥也

うのたき相 揃うのきり

唐より侍て合ふと又唐より合ふとあはれ也

ひんあー乃ぬん 二条院の東院

あまよむのふそなり ゾシヤ 服志なうても用

アツヒ 馬鏡を服若かりても用くみひを画服なり

わうくりとらや クキヤ ちたおの思入らほくは深たる哉

いふや フキクイロ 深栗を袴のまを志あせり

阿ませ乃その方 カシ のさねきけちもあつりのなり

今袴を申せれるに坂つり コカイン 若用たるゆへお代ひり

東摘 トモツム ぬり乃と

裳のちさきり ウスラサキ ちさきさきしみる心也 カシ 或説よ下地と

深 ウチ 深てと ウチ 深たる文とけり

ちさせ針へ文 ウチ 文詞

れり ウチ の 双地 ウチ ねとけり ウチ さとまひり

けり ウチ すら乃 ウチ 唐心 カラココロ 城つ袖の文詞さ

けり ウチ の ウチ 唐衣 カラキ 日にも又尋にけり

さり ウチ ありう ウチ 尋の ウチ 尋にけり ウチ 尋にけり

ちさ ウチ の ウチ 尋 ウチ の ウチ 尋 ウチ の ウチ 尋

まて ウチ 今 ウチ 尋 ウチ の ウチ 尋 ウチ の ウチ 尋

いよよくつまらなるむら
う衣又うむ衣 束揃う衣多衣又ぬいよとぬ入り
志のいひやうふ 玉乃強

ろくろく 朝暁れぬうかりとかり

りりり 唐衣討後と 双地る

さーせ けうよ強ふむか人とかり

まーれなやめ人い び巻よとめ人い じ業る

蒙志の系式包てのるる

けおつこと 源れ源切と肉の思るなり

やうめりとして 勝法も海りしと人とかれは娘やなり

又此後せ蒙志して後と源れ源切極りりこととせ

い連ちり強ふ 強仕強玉乃強をふへせ

うられれまー 志きの在り

沸とのけふら 蒙文打連て虫思包強とわ強る

りやてゆりり 儂りり心也不こととせ

引ひをい強ふ強 蒙の勝りり

え志のい 夕親のるりゆへりや

いけへき強乃 夕良此事を今取を親云がんを中

中一強もぬと 源經也

人め強のさうとせ 夕親のるり不意人めと強とかり

けふらうよ ちくの討源乃強熱切る事と強とかり

うらめ やあ 強仕 玉康を蒙也 じよふ子あうへ

ひめをまゝ玉へ嫁仕奉りしをたまたま人のつかへし

まゝさふれおのりしをたまたま源氏

よけへなまを代りて運送玉うらうらに成てよみ

るうきぬまぬ福よとやあけうらうらに根下さんとい

やうそつあことにも心とあり

人ー運送をひひ玉を兄弟志事ひひとー源氏兄弟

とあてうらうらも又美兄弟と今とてうらうらも思なり

れとこれのそやもぬめりまなく源氏の光あれや

ううれとたり

中々の申され様おやせ世上人まよとす討へとも憎む

と云る自地かあまことと云る

世うらうらまゝ嫁仕源氏種

まぬく乃人玉乃指折ぬハ嫁仕も源のたあをいり

とたり

くくをそなりは肉大長討

うをさうらうら肉大乃のるりのるらうらうらとてその

以後共教へも忠定とたり

うの湯妻も肉大乃を愛慕うらあつらうら

女湯はうらうらあてうらうらに玉乃事仕奉り也

志事ん自然よ世人のよとあゆりあゆりをはきて也

二うこれこそぬれらん嫁仕と源とふ二方とたり

あふなけよおくもるれゆらうら

あなりす 拍へ舞く所のと相なるおを^手きりんとせ
文けつへおと 女はへつりつらふ肉肉なとらへ成や
せしとせやひか
れまへれ 女はとらへてまら^てておとせし^てたかまか
なつり^てま 拍は^てて肉肉のり^ておな^てめとなり
あり^てま 舞用のる^てま^てひひのる^てま
志^てへ^てあよ 志^てび^てま^ての^て退れ^てま
おの^てま^ての^て方^てま^ても^てい^て訓^て進^ては^て志^て成^てなく^てあり^てる^て程^てなり
肉肉な^てま^ての^てた^てく^てひ^てあ^てぬ^て進^ては^て舞^てとなり

し^てま^ての^てか^てま^て 日本記^てま^て一^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
天竺太神^ての^て庭^ての^て踊^てる^て舞^ての^て變^ての^て今^て榮^てく^てま^ての^て志^て

か^てま^ての^て庭^てと^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
照太神の^てい^てる^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
て^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
あ^てく^てげ^てら^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
と^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
ま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
あ^てま^ての^て志^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
と^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て

お^て今^て修^てる^て席^て注^てニ 素^ての^て志^ての^て志^て太^て神^て乃^てこ^てろ^ての^てま^て
と^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て

道^ての^て志^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て
の^てま^ての^て志^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^ての^てま^て

いふは説なり 矣

うれまへ 女師教を又出せしめたり

うらうらうのうらうのうらうのうらうのうらう

れといひきやうふ ねといひくへ へんをうらう

さあろ

ゆきへ 女師教を乃つる可也 大やけみよ

く叶^{カキヒ}と人となり

ゆきまき 俗^{ゾク}軽^{ケイ}よめなり

後にとみたる 耶^{カキヒ}那^ナ乃^ノ一^{イチ}炊^チれたるなり

ひのよを 胸^マの心^{ココロ}をねとろく心をあつたり

若^ニかり

ゆきあや 双^{ソウ}比^ヒ 肉^{ニク}大^{ダイ}ハ^ハ寒^{サムイ}くせとるなり

ゆきまき 一^{イツ}宮^{ミヤ}く 望^{ノゾミ}お書^シ文^{ブン}よとるなり

びんまき 秘^ヒと けんはすくとまひなり

ゆきまき 湯^ユ門^{モン}乃^ノ法^{ホウ}事^ジなり

つまぶきのやう かんれやうにまきそるなり

むり 咲

世人もむりのてふ 肉^{ニク}大^{ダイ}のとはえはうらうしうらう

むらびまきをうらうて かくあつひのうらと世人も

くくく入^イりたりとまきうらうてとまき 畢^{ヒツ}竟^{キョウ}軌^キよて

おとよのむらう

源氏 鑒並

源氏世七

八月九月の本あり三月より又月イッツキれる乃乎物經不覺

は肉より定て内侍のころよ此業より事ありし

肉侍のころ 茅アサヒ 軍家カミなりし尚侍カミは經をくれて故内侍

とある

これよりくむ心申後仕 源也

ゆりかしの句

たやせ 源の事 玉又む心 玉心申也

まて 源氏人けりか 入内まで天子御討をり

らそ程となり申之女内へもむたてられてをウラナヒ察あり

しとらや

月のみおちく とうれきお申打とくせちちてと也

たりひとくめられ 源内とにカクシ後身入申もりた程を

なりとなり

たしまつる句 程もかめさき程をよてありとれと

夢ひいふ人ありんと玉心申さる

うきい 物呪祖スヒユラ ありれと心人多うしんやなり

物なひの 玉れ心申城をけりりてありと

さるよそあり あり

肉侍のころの事 變りなる程をもとなり

あのれとくのを 源好まなるを

人のとりりり 源のまをこころとまはり一の権勢也
うけく 源のまをこころとまはり一の権勢也

ことに 実父^{ビツフ}別て様と源れめあれぬなり

おれや 二親^{ニシツ}ももおれやま心^{マココロ}はまる

つひつひとく 源と由太となり

おひたの 大まうせお人おなりへし 娘母^{メカハ}れ服^{ハカマ}のりる

色一

宰相^{サウザウ}の中 夕蒙^{セウモウ}おゆ幸^{サイキョウ}ひ巻^{マキ}れるなりへし

外^{ソト}娘^{メカハ}母^{ハハ}様^{サマ}服^{ハカマ}直^{ナカ}家^カ純^{ジュン}又^{マタ}平^{ヘイ} 宿^{ヤク}或^シ清^{セイ}開^{カイ}又^{マタ}と用^{ヨウ}卷^{マキ}纏^チハ服^{ハカマ}志^シ

を冠^{カウ}のりさまをれそなり

若^{ニギハヤヒ}画^エを冠^{カウ}りへんする也家^{イヘ}より侍

いませうあり 外^{ソト}娘^{メカハ}母^{ハハ}別^{ワケ}て電^{デン}をれお心のまどへ入^イりつ

源^{ゲン}のりあゝなり

りたあゝさるゝ 前^{マエ}と兄^{ケイ}才^{サイ}とてるゝさるゝなりなり 成^{ナリ}実^ミの兄

才^{サイ}よあゝおれとさるゝのりつゝんを兼^{ナカ}持^ヂとなり

肉^{ニク}よりお母^{ハハ}せるゝ 肉^{ニク}肉^{ニク}乃^ノ事^{コト}を化^カ初^{ハツ}おゝるゝなりなり 源

よりひた書^{カキ}りて正^{マサ}へおんをりれくるる

うしてあは 兄^{ケイ}才^{サイ}とわのひーなり

きくあゝめく 夕^{セウ}と兄^{ケイ}才^{サイ}たゝぬゝなりなり

れりえなりし 源^{ゲン}を正^{マサ}と定^{マサ}けりへんなりなりなり

あういあゝんと夕^{セウ}れひなりなり

さけりり見えある 入^イ肉^{ニク}なりし申^{マウ}又^{マタ}お母^{ハハ}なりしを^ヲ始^{ハジ}事^{コト}

うーひほくーしんとるを

人よまのす 源氏秘^{ヒミ}云々とやー終るなりとたり

定せうと 源乃終ぬるをけぬりー

うーなりぬすら 天子さふい玉とね海さす一丸事

おせりんこー

れえおれふまーく 夕の心^{ココロ}産也

清ゆくをび月をを 二月あれも八月廿日はたろつと也

元正^{ゲンセイ}紀元

十三日よを 出^{ニガ}海原^{ウミノハラ}解^{トク}深^シするとを せらひとすらる

なり 服^{フク}とく心^{ココロ}なり

人よあまひく 源乃^{ゲンノ}ゆめれをなせば^ナ解^{トク}服^{フク}あつとせよん

く可^コ知^チるい^イゆくとある^{アル}は^ハ心^{ココロ}を^ヲ藤^{フジ}の^ノ心^{ココロ}と^シかりの

あのをゆめを^ヲ書^カら^ニ蘭^{ラン}と^シらん^トあり

りうきと 面白^{オモシロイ}詞^シ物^{モノ} 中^{ナカ}おを^ヲ大^{オホ}文^{ウチ}の^ノる^ル 歌^{ウタ}忌^{イミ}の

たき^タじ^キり^リと^シる^ル 詞^シ也^{ナリ} 縁^縁と^シある^ル 事^{コト}を^ヲ志^シめ^テひ^ヒゆ^ユふ

ハ^ハ草^{クサ}曲^{マク}と^シかり

う^ウこ^コに 高^{タカ}城^{シロ}ふ^フ今^{イマ}を^ヲの^ノこ^コ又^{マタ}れ^レ夜^ヨの^ノこ^コも^モ袖^{スベ}と^シゆ^ユ

あ^アれ

あや^{アヤ}さ^サう^ウま^マて^テけ^ケら^ラま^マぬ 源^{ゲン}乃^ノ玉^{タマ}成^{ナリ}の^ノ行^{ユキ}な^ナと^シら^ラ事^{コト}

城^{シロ}の^ノり^リな^ナゆ^ユへ^ヘと^トも^モち^チら^ラと^トされ^レと 夕^{ユフ}の^ノ心^{ココロ}産^{ウチ}也^{ナリ}

あ^アり^リり^リら^ラを^ヲ 服^{フク}な^ナく^クさ^サ何^{ナニ}中^{ナカ}も^モ不^フ意^イと^シて^テあ^アり^リん^ンと^ト也^{ナリ}

夕^{ユフ}秋^{アキ}の^ノ苦^クみ^ミゆ^ユめ^メも^モ一^{ヒト}巻^{マキ}不^フ意^イむ^ムく

おき 回野とさひのこも結と尋ねるすま登籠とあぐ
思ふ我他さやびのこをうとあぐのあちくささき
と可心坊 花も可結

あさきもあつさま 花乃心やまのうさあぐんとなり
ほめやうおそ 又仕のひり 又さうら物乃兄弟と云心
めれ討なり

今りて めひやうさくさかたをてもあぐんせきさ
俵めれを今もさける 新波なるあつくしてあぐ
んそそわのよ

乃中にお 兄弟と不志してきりれをがの女ハ今歌中
乃力れうへれやうよ殿らると也今れつりまうく力乃
成らるあ中ハ今を身とく訓てなくさあぐんとや
あぐぬなり 双

うんの志 玉と妻よ始てあやうと
いすまあーめに 雲上 野らあれなり
れまへる 源外抄前よる

つて新ひける 源外抄へ出ゆへり
あのをつるをと ちぶく源討肉肉のつともを成てあ
あぐくならむあ殿あけうをあき乃中ならへし
文なや乃まんじし とうあぐんて云討の練習なり

あぐくならむあ殿あけうをあき乃中ならへし
文なや乃まんじし とうあぐんて云討の練習なり

あぐくならむあ殿あけうをあき乃中ならへし
文なや乃まんじし とうあぐんて云討の練習なり

あぐくならむあ殿あけうをあき乃中ならへし
文なや乃まんじし とうあぐんて云討の練習なり

あぐくならむあ殿あけうをあき乃中ならへし
文なや乃まんじし とうあぐんて云討の練習なり

あぐくならむあ殿あけうをあき乃中ならへし
文なや乃まんじし とうあぐんて云討の練習なり

女の三つ、儀礼云、周礼、礼記、儀礼

婦人^{ハカリ}之^ニ後^ト之^義也^{専用之道}也^{夫死}後^既婦^既夫^死也^{夫死}

後子^加父^志子^天也^志善^夫也^三後^乃儀^礼也^源氏

此^義也^其也^又矣^父也^其也^源氏

詞^之也^早 花^海鏡

此^以て^也ち^るを^そ 次^才也^後仕^の心^不可^短也^いと^た

の^心ん^もの^あは^まま^きと^もや

を^此の^心と^{あり}い^の源^自乃^事成^也也^也

う^らく^もも^好く^は稀^後仕^れ心^中と^し行^るり

肉^中も^の源^乃の^肉也^肉と^{あり}ん^だの^時心^を回^死

意^上な^と好^りい^人の^まま^は好^てす^てく^らう^し後^仕

ろ^うゆ^つり^ゆふ^となり

ろ^うき^んと^らう^ろう^吳中

海^うせ^んと^ある^時を^論字^交定^すら^うこ^へ成^の論^也

て^の心^もや^らう^ろう^とも^時を^多歎^とこ^めと^く心^也

終^之馬^宰ハ^歎 嗚^又心^をこ^めと^く心^可短^り

う^こあ^はる^りなり^とら^うこ^心 志^を短^にあ^ると

ろ^うと^いハ^中也^志

け^みさ^きむ^となり

ま^りく^しき^曲心^の也^心れ^らう^ろう^まじ^とも^也

の^心ん^もの^心の^清也^心と^る也

お^のひ^くな^りや^花故^撰文^川の^心ん^もの^心と^る也

此のよきとせやぢひくはなく人のなりゆく
私にけぢのひくはさねのふりひもたれたの

程うさうひき うさうさうさ夕乃ひなり
れとくもさるや 源世上乃因さむと思はなり

あふれたけり 又おにりきと 曲楽とあふなり
まけうへ乃 まつり魚さくを捕まれば人まは推量むや

むくろたれまれうろくまはむやとなり
ぬくを 九月のむ月也

まあまぬあ人く 善兵衛 毎さあ
かたぐ備と てとあへてあか乃流させまぬとも人れ

ひきひひくをさねのふ 六帖
中におも 夕秀

まつのむけとれ 玉の美実乃兄弟なり
ちりつあなり 拍れ玉への心乃かろともく成るま

榎れけ 庭前乃榎の陰也
歌中乃のいうひたるけなり 不訂せの

夏行連とまやもあつておれくれ月の榎れけおひく
まを 討けりりの

みきしいれく 兄弟と 不訂るまとなり
宰おのゑして 玉乃いとこ 女房前也

さしぬたとひ づうふうや づすなうぬとも
枝よそあうは何とくさるはまはひ満むそとるま

こたひめりら〜〜いれるしれ連枝をとなり

物〜と 女曲也

かくまそとらめ 玉れ討結句とら先結ふらうよそく

〜〜とたり

海りるはらん程の 入肉のるも源次才肉と乃事

とをたふとれと肉大の〜ゆふとたり

中〜く 肉大モキ乃以後ひりとも死とも

りてやれ〜のま〜 乃中お討まへれげらうの文なやれ

業〜るなり

り〜り〜は書ても 兄弟と又さる〜〜りれ書こ

うとの二方なり

おれと〜〜〜〜〜肉このあや

〜〜〜〜〜事〜〜〜〜〜

るたれせめ〜下つりる〜成せとたり

ゆ〜るんと死〜也 女房お玉〜りり

けふ人き〜と 殺仕乃子〜兄弟と〜さんとい〜

と〜りり 玉れ討

り〜中〜く 兄弟お〜〜めり不を換〜とたり

妹せ山音り〜とせ兄弟のり也 万ニ妹ト兄と云

は〜りの中〜りり〜りのゆあんは〜あ〜ぬ

きあ〜み〜たれ〜 讀人不知

ひりま〜い〜せの山れ中よ〜ふゆは〜の〜

もきびとさしれ橋ハ申とゆふと云きふしをいふ

後拾遺

道雅

みちのくれ結縁の指やきりし踏をゆますこひまを

さひ 音の折 心回

津國れなんをねもます山嶽れとをみあひみんとて

乃こころ

人ぢらなりき 我ひうし又なときしてひらふとかり

まといまるき 玉也さハ何とも不志しとこしと也

もまがしを又うしうをいふ

つゆのこのぬと 柏を兄弟とたりひてふんとたひし

やうしんふ別なりうしやまら

何るしをわりなれ 玉乃心を甘奉前老念にやとをり

をれつう 今よりいふとくくをれもせしと也

よりさうの

信者とあしをほくやもなのぬとふ人志者たふと云也

あうくうらう 芳流よりてこを恨もせ先とる也

あくおん 覚悟を 芳乃様とるをとり

又嚴格勸 志公すう人ととりけ後 瞬 可説

あぶと 吳本て月不入

ほなのらひ のやうの人出せをうれくせうとがり

大ぬハあの中ぬ 舞思大ぬ中將回志乃もひとる也

うこすげせう 大中小ぬ也 花ようつあめあめ

つと相違あり

清うーろこと 今上乃うーろみよ殿へ美人なり

さねやう 源のれりめを^{スチ}編うとむね^五おね^五おね^五

とるを 波仕乃^シ伊心^シとひくあり

まきの女^シ 母女^シ也

お目い^シ志 嫡^{チヤウ}女 才一^シれおね^シ女^シなり

ねかなとつあて 年あうくてあると^シ嫁^シて今^シお女^シと名

おねへ^シ 嫗^{ヨウ}老^シ女^シ乃^シる^シ也 枕^{マクラ}双^シ紙^シ中^シも^シき^シ討^シなり

そのすち^シお 慧^シ上^シの^シ姫^シと^シう^シむ^シき^シ流^シふ^シゆ^シへ^シお^シよ^シん^シの

う^シこ^シあ^シる^シる^シ

の^シれ^シと^シ 玉^シれ^シ美^シ又^シなり

清^シれ^シも^シむ^シけ^シ乃^シ 源^シれ^シと^シま^シつ^シり^シを^シの^シす^シ 成^シお^シね^シす^シ也

弁^シ乃^シお^シも^シや^シ 玉^シれ^シ女^シ房^シ 大^シお^シね^シこの^シも^シ人^シなり

う^シす^シけ^シう^シを^シ 又^シ月^シ九^シ月^シい^シひ^シ月^シあ^シれ^シとい^シむ^シ月^シの^シ合^シと^シよ

や^シ月^シと^シを^シ入^シ内^シと^シあ^シけ^シま^シう^シす^シな^シく^シへ^シい^シや^シお^シね^シよ

の^シこ^シけ^シり

い^シり^シひ^シな^シれ 人^シ乃^シむ^シれ^シう^シの^シゆ^シを^シや^シて^シも^シと^シる^シ

お^シ目^シい^シを^シ 玉^シ篠^シ乃^シ兼^シ分^シに^シを^シけ^シる^シ 白^シ奈^シ乃^シ今^シく^シ世^シつ^シん

我^シる^シく^シなく^シお 物^シ目^シを^シ天^シ子^シよ^シは^シく^シて^シ也^シ 玉^シ眼^シは^シ觸^シれ^シふ

や^シも^シ兼^シ分^シれ^シお^シ乃^シあ^シく^シる^シ 乃^シ乃^シの^シ兼^シ分^シと^シる^シわ^シす^シな^シく

る^シを^シ共^シの^シ乃^シと^シお^シう^シは^シなり

下^シれ 藤^シの^シ葉^シは^シけ^シら^シる

志本抱 板河 寺の志本抱の箱とあり

以高が巻名 源氏世七より世八女の十一月迄れる
あつと いをれぬに舞臺の室小玉乃成治るなり

肉の志本抱のめさん け後片を可成る

舞臺を舞のねもとらむにぬよけしと尚治る成て
のたたみ肉をたれりぬるなりあるまゝと事なれ
と肉の志本抱のめしてはとらむあつと舞臺のなるに
しりてあつとらりしりしと源氏巻もや源を治仕も
治る事乃事なりなりや治るのめをせしむるも双紙
なりあつとらひとあるなりあつとらひと
志本抱のめを 源氏巻の中

きしもはしきと 大おの押也

箱あれと 玉乃大将と一ぬりたがしめをむるなり

いみじう 大おつと思入り

よおれ抽う 玉とみてあはれくちん取ふ箱の箱にぬ

しそととねのあつととなり

りし乃ほとけ 井と沸と云事玉駈勇れ巻よとらり 早

ことりぬりたり 玉の治まもんあつとる并お仕とせす

しそととねのあつととなり

ひらりきと 小方物氣也

ひらさね 大おおお親音へ初念の平源枕をれたあつと

あつと也 玉の心あつと人なるなり

よそん坊を向坂をみゆきやせも成給らん人となる
然く一々ハ高侍を第けりとの官までめい大将
のより一終へもふる終へる

あも月小 祢りさ 十一月祢事 一日祢祢友始彼清賢

賀茂祢王 遥拜ふ前より乃お南月祢祢事多之

肉侍本も 肉侍司の中 尚侍典侍章侍 女孺 けり

ホのなあり 女官を尚侍此里第へ入りつとるなり

兵衛乃りも 玉をひりけり人におお小方兄弟るれ

を幸おがけきたるとなり

おさわりりのふ 祢カ おあやうとくめを

こへく一た玉の神とつり

ひそそ 玉乃まれとの契はうねともとなり

れとこれ 舞黒すしむるひまやすると源のおかすらん

のころのーまともる

まのほひきぬ 兵衛つ

敷と源 玉うへるうりーとこひーと心

まよく成となり

今あつに人の心 好まねやれ奉す用と源乃らん

お月し ぬすまら

おれくうーう 勝ふる町源玉へわり終ひてなくさ

こめひーなり

まよりの 玉の神

けきしきき海 だもかれはとをねをそりしくし

よはらききなり

すくよのるをそのはひ 舞ふれとの神と源の紙おのひ

わらわだたなり

おひれ外なる 大物と舞ひひりてはるのりりて

いりや

やうく ああの下とくらゐる

らうたの 嬖姫のり

おまをちてお ねりはらてき物にとりひりりきふ

おりまのとも三途川をわらう時契一人のまをとり

してりれといへる大物乃おとを思ハるるやなり但

又一二の句ハを美乃事や人のせといもんだめりた

この川と可むは 仍ほ祝 呼もは舞を之

おひれ外 ちと釈したる

まのせ川にち 地獄乃絵をみてよめりや

まのせ川渡みさかをならうり何よ衣とゆきての

くらん ばき後理多之 ころそのなれるりけりり

ちやく清くくろし事事をみまき物をとや又れ後

を人と云物を死物定ふる物なれやも程とやくとよや

あの儀も可然也

心ねさむの 源詞

よみみら 三途河の事なり

信てれさ死つり 元初嫁命乃男必は川城引渡せと云こ
ねのしちる事も ひきり乃るや

志連くーさ 愚癡と云むるのなるや
子なりつねのひりをいふと 瞬まきし

又ーろやとさき 実事なるをいふるや
たふひなくひきりておとろ又おひふれくをされと

しと可心得
きくろーと 玉れ源の詞となり

肉乃乃乃守ゆ 肉裏れる 城源詞
をれの袖と 大おの袖う 玉を依する事となり

思ひろめ 大裏へ海りてん乃ことなり
二条れれと 玉の真父 葵上乃父と二条のれと

とーろーや
おろまき油中も 玉れ入肉の事となり ぬきけらう

ひぢやとさるい
りこお 大おへ玉乃わこまねとんる 城源のゆり

ゆふまーきゆや
ゆりしあもゆふ 入肉乃事うものごとく大お乃

ゆりしゆへま
かゑ人よ ことろとよまき 双比

大将の中れ小方の人ゆりにけり 抱氣おむらとて

信者あさなり

なめふふ 玉の形カタチをくられたることを

うらうらひし 源氏れりのみ玉とめさしんとうし

あひるなり

人きやきー まつりーまよとまひまら 恥也

何ぞておれりつうよむゆん年のおまさんこ

とそやきーま

とれのあしん 式部つまの世サイセの中ハとたり

今まのまられか おふの心

ひすおなと お方お断りおすてーらりーたなり

玉とみのまら玉つうのまます六条院をみて乃目

ころしなり

おらふれ おあへ大おのは神討舞志のお方なりいま

へりお討まら

とそあつたまらまらうまらありつまらーを

志あふとなり

ねふあうとむれ 地下おれりうとむらとあひの討死

ひとわりえとむらぬ 心れおを志のむらありぬ

り城見とむらひて坂のけしと理コトワリとなり

今志りー物てはらんをよけーとそをぬいて恨ウラミあふ

とそさそありぬ人ま事なるれともむや

ぬくとおれしとそける 志ココロあうとたり

志りーうらど 恨とあけりんたうまんとらとら

はあーうと。よりけとのなと也

そこの志 年 女房達なり

うろー心 物のけりえうりなり

かあると か連うらふとの詞や 小方お交すと此書

のあくーえとる也

みえられ キナシ 支訓ふらじ也

あすうおまかへは つと カキ 歌きくもりぬびり

まのあしうは 大お討

おのされとくれ カキ お徳おのりきりよよ及まよとる也

人のつらきき 小のあれ討

いりてのみしまらん カキ 文とるや カキ 文とるや

ふと人のやを 大おお方と書上と兄弟とる也

うれはあぬさあうそ ぶつうしり 弟をさぬさあ

よそ源乃あまぐわひと語あり

お衆もあしおきおれ事お書とむねとさびりつーきの

人のれや 年 書上小方兄弟なれとも カキ 賢舅と大お

にあしすうことも書と源とのあひとされ カキ 根あ入り

あしうらやもあしも 小方の何ともねまもあぬまも大將

おりの力をまのせんともや又文さ何とおねせとたり

まのれあひたのひ 物のあれ カキ 乱あらん時さうとも也

ら カキ さいをめれやう 書上のり也

おのひれとされらる カキ 賢舅の宰とる カキ 一人の上と也

人のれやけなくよう 或はつ乃文そのあなり 呼
業上とやしを文のけ子なりは業上のめとあくとれが
きくはくされやをわねとなり
びのる火燃て 日中紀事七云 日中紀事接海して赤男
と征し給ひ一内賊徒野原獲し一は赤男難敵とて
と新て向火と燃ゆ也同扱小股立とたると人
のうししがともさなりう ねらさぬるを
とくびとて 大おとそとまらうとお方とてなり
ゆる日ひりのてりごととまらひなりう
人のつひなりと盛あつても女房源がやをばあんと也
まとまり行ても あつかりも別よむあつても曲と也

お方詞

袖乃とかりを おのひにけねなくまゆの冬れ夜を袖乃
おのとけともあつるれ
まゆとさ お方也
おひげさ法 大お立出まらぬ折るを
りのあつひるま 源乃るりなり
れおよよ 男くくしとさなり
中おりくなどあつれれせや 盛のせうれとおあ乃お
よまを私れ恨あつるや
おがさなるあの下 燈物の終の下烟ふまもつとも我独と
もあひす人しわさ 袖よお入れ物終

いのを ^{ヨラセツ} は書とて雪よ水成即く御神

みあふ御神もかく 見え見え人すなり

ひたりひとを 物の氣也

よづひのひせ お方乃御の氣は神

うんひのれ ^{キカワレヤ} 幼若のおこしなすすなり

かひへひをそ ねがふさひを

まじくは ちつすくみなり

ひりくさ さむのてあしよて御氣乃心ををうみん

— ^{ヒトコト} 御独これ神とあるとせりなり

書もよハ 北極字 經脚也 呼

づやのふ 葉もあてふなり

このはほりうふ 玉をひりてん程とるま

あうとありか ^{ケラキキ} 氣神也れうく—さひの

めやとく志なりけりん お方のひよ水成あなり

人まう— うんじなり

はゆとの ひり水成也

ひとこわく奇 ちくの志 前中もあつ火^{ヒナリ}をよをこら

くらねかむて 奇をよめいひらう—と神なりや

なさけるれるりよ 双

うま事と奇 大御神の氣れとのりなり

しとの外なり 如はありま—と事なりとめられし

るりれやしき二佛の中^{キウジン} 可成とかなる

おのの如氣かやにとるま

いとむもく 中乃おあへま

とまりぬ 玉れくお也

あちま しくくくく

おろとあし一人女子手ハシラヒキニ扶植婚ヒキニなり

立けくふくこなく 大將よあむなるま

今ハおきり 小方むあてさあつぬ人舞もなり

むつよう 小方大およれままするしと也

名のむれ 類

中乃おの後民の太捕 兵衛ヒヱの舎ヤありま

向民シラタラの太捕タラ小乃息子と紙ヒ紙ヒと也

今を立例レイ若を立シ大乃家ぬけ

拾遺シユイ 共乃ゆくこうそ 拾遺シユイなり

志のむらせ 拾遺シユイひてぬと云り

はせく 徳をむむへくえ かくるんまその事とて

もう死なり

男あたらを 中く面白也ヒナシロ舞ヒキこれくへ往キ来キなくて

を不可許シる申くうき力チカラなりんとするま 今を具ツグして

まへわこりぬへま

ま乃れをせんほと 肉なと人集リ結ツもん時のるや母れ

わひぬへり

のれとくたら 源後仕乃天下をまくと也 玉うつ

うごまればなり

はとろふ志しきま 一か 志められてとあり

けつハろちさそち こちハあちとがうらむ心

志め一燈う) かなとふむよわ可^{ユル}後^ニ也

まるとそ 山林へ回るせんをいりしとなり

それうらむむき 女^メ年^{トシ}ゆへなり

ひう一物^{モノ}短^ミ 恒^{トコ}昔^キの物^{モノ}短^ミる^ル 嫡^{チヤク}女^メを又^{マタ}を^シ終^ハる^ル 誓^{チカ}ひし

りとも^{ケイホ}継^{ツグ}母^{ハハ}れいひ^ヒよ^ヨら^ラて^テを^ウろ^ウふ^ウ成^ニる^ル

ま^マて^テの^ノこ^コの^ノや^ヤう^ウ 又^{マタ}とい^ハふ^フ形^{カタ}け^ケり^リを^シれ^レ事^{コト}なり

大^{オホ}招^{サウ}成^{セイ}心^{シン}なり^ルなり

名^ナ結^{ムス}る^ルま 妻^メ人^ト乃^ハ思^シひ^ヒす^スけ^ケう^ウを^シめ^メ名^ナ結^{ムス}ば^バう^ウひ^ヒる^ル

の^ノ寸^{スン}那^ナとも^トさ^サあ^アして^シ 又^{マタ}今^{イマ}や^ヤの^ノま^マに^ニま^マで^デと^ト也^ヤ

と^トの^ノ片^{カタ}も^モり^リと^ト 唯^ヒ志^シ又^{マタ}乃^ハ玉^{タマ}より^リ只^ヒ今^{イマ}を^シ後^{ノチ}に^ニん^ンや

と^ト結^{ムス}ぶ^ブあ^アく^ク後^{ノチ}なり

ひ^ヒり^リと^ト又^{マタ} 捨^ヒは^ハる^ル 女^メ植^ウへ^エる^ル 縁^ヰあり

今^{イマ}ハ^ハと^ト今^{イマ} 唯^ヒ志^シ

り^リて^テや^ヤと^ト 母^{ハハ}志^シと^ト見^ミゆ^ユなり

か^カれ^レま^マと^トを^シ 何^{ナニ}と^ト必^{カナラ}ず^ズと^トなり^リひ^ヒて^テま^マと^トま^マら^ラん^ンと^ト也^ヤ

せ^セ心^{シン}れ^レ植^ウを^シり^リひ^ヒて^テん^ンと^トま^マ心^{シン}死^シ

せ^セ心^{シン}な^ナら^ラ植^ウを^シ万^{マン}一^{イチ}なり^リひ^ヒや^ヤ出^デん^ンと^ト必^{カナラ}ず^ズあ^アま^マの^ノ事^{コト}也^ヤ

あ^アさ^サけ^ケま^マと^ト今^{イマ} 今^{イマ}も^モあ^アさ^サけ^ケ人^{ヒト}と^トけ^ケり^リう^ウめ^メの^ノ人^{ヒト}な^ナれ

と^トあ^アて^テ水^{ミヅ}方^{カタ}を^シ熱^{ネツ}放^{ハク}り^リよ^ヨと^ト熱^{ネツ}と^トま^マと^トま^マなり

ともひくを奇 志入を云字とよみらる何も数り不定
世男とある也

ゆくゆくまてう 志の住者の本すもゆくくもゆく

ゆくゆくまてうゆりやーも 養家

カケル 歌本抄 又選

志のすじ 大御家より心をとむるまでハナ一久訓し

志のすじをむりかとうる也

ゆくゆく 養上後母

女御も 或部つま乃女侍好中にとされゆひ也

ゆかれうみ 江戸への町に養上もも懐なり

人ひと里城 さまの心やとふ城を養上の免一許さん

つととなり

不とりぬても 姉妹才兄監列士

列ハ一抜去國也 揚貴妃れ兄弟玉をゆさねらなり

志の一本ゆへる 成茂野の草をまぬくあそれとそ

みる 心とある也

ひこさるー 選服新むねとなり

心とある也 心得りーをむるをさるーと源乃

まの子どもあつひよをれ建とを養上とあるーゆめ

ささるとあるふりなり

ゆきゆきとあるふりなり

ゆきゆきとあるふりなり

しんとうと云儀宛

ゆゑに前とある一が狂く申上る

時乃心を建ふ所 終人此とき玉れ年乃終ひとれ

—みのき可終と云々 私いづく

ゆのう 不幸

うの色を以ぬ ときへ^{コト}の志の差別^{ニヤダ}ありとなり

家よりあすの 或終つ 又十女源氏れこまひ終りまると

し女巻うい受

あの—やう 今生也

ひくつり終おけるを 玉きて大お小方へわくを終を

お終おてはり

あつひきいぬの 終りしんひかた平上となり

中しくむやとから 終くお方乃るる終ひとらう

あそつしすとお 中をと玉れりる終ひしすみやの

堪無あしん人まくま—やうしと終る

おりのう記て 或終つへやうんそと玉るしすまこひ

たまひなり

柳の下うさね 下^{シメ}終を町^{チヨ}あふら終^{サシ}揚ハ十一月一り息

用^{ヨウ} 物^{モノ}をいふと号ま 夏^{ナツ}を知^チ終とりの日^ヒ物^{モノ}宛

まのさしぬゑ 侍^{サマ}れ終^{サシ}終^{サシ}乃^ノ用

かとうよけなりらん 玉よお終ししん終^{サシ}終^{サシ}終^{サシ}と史

めだう めんたう也

見しつゝのしをさ れきくさるは又教けりたり

中へ文 林好中文 福井 弘徽_ノ 内大臣女 は 文女_ノ

源兼政の御よはゆゆへ王 老乃大政女也 老大臣女

源幸より大政也 舞志兄弟

中へ綱玄宰相 誰ともは

春文れ女 舞志の妹 舞志の母儀あり

文を春文い まこころのくちを まもるも母女清き可に

あひかりの光くひ也 花やのいがめふらひ也

もあき流 首 う 倉りまのひをい度をは 三

回又人より 源仕れ清子多也 源さよを必行川より

八郎 志きじうひ服 志 志 志 志と云ひる也

柏と同服 八番目也

大おとれく太郎志 十はよりまは政とあり

おろしものく文あひ 玉の局乃神は別てとなり

あうーみも女也 さうーとハ玉も

女等並も内侍よりひひくならし

おまりあるみ何あり 玉乃くこりハ水澤なるへえ

おまこくーまのあれはーく可強となり

さあゆへく 玉れ女房前のもり

れく乃心 源の所別はれ方派中へまんくのへ内

はんと美子の内心をゆきて源退おあ連とやうや

ひあしとくあふひとやきり

まろくしき 又迷くけり

ひつしき 大おれし

ひまうれぬ 井つやきる人とまのこむの

れくれもまもん 河畔

大おきつとこれほうし 直序也 大心道集府曹河

太山木おき 共アツま 大おの唐め 大樹

今をお軍とヤり

又なくきたらひなぐ也 まはひてき花のこり

をほよりけり 大おくしとまてつりせむを娘の

兼りうや

あしけり 百おきあしけりまを地毎よあつたまん

ひまうれぬ 妻おきとあつたおれ又しを玉へ

とけりまを地をわりあをたると也 引寄面白

又もねり 源のあつくけり人をかたとおひにた也

この沸ひまを 源氏のひかり

あまのなせの 天子よん玉れひひくの源を親系うを

まもるいぬと也天子つし一向別れするれもうや

れもてまむむおれのくうまひかり

あやう 勅云

うらこひかやも 肉肉のうこれま後云位志給り也

流をせ一おすくせ 以前もむうつ乃つれなく流り

へぬともやうにさぬを振返るに

おとてゆく言 紫は灰山を焼く搦市の八十れちきこふ

あひしこやん

なひあひのこきを灰不定ひ也灰不定もんと文ありさ紫

とまよはして契のあひしこきむらり

あくまを 四位ハ多儀 三位二位を又あれた也

たのひあへれ 源よ直上よりひあをぬにふりてむ乃訓

又てりへあふとるまよあの人とも思ふおし思入り

まつり包れらうもなけてと 双比

ゆりなしくん言 三位より紫乃多を用ゆへよか階乃事

とらあま そなこりうまくよりのあふらめこ

あしき何をも其を別とかり

あふとて又々の外乃多を紫又言外を註のあふん

なたとも又成りあうひてとよあり

今より又のを別も今うと志あうんとなり

うまふへま人のあふん 人にけ怒どことりせまも源入

むの事とさ前化神は昌批判あまともあふ

ひろりさまの 世人れむのくせむはのしあふなり

源氏なとれむとまあふゆへりや

大おをゆく 西門乃海約事とかり

まとりあふも 偽疑まともするとも心死

まひしも 世の心中 晴まを 大およても可疑とま

但れ先給事すまきりてしあてりて大おひの
又し一たてぬ 賜不^カ託^カ密^カを大おらして又入内^カ御^カを
いと天子此^カ信^カひ申^カ

若乃さふり 故撰云

大納言^カ團經^カ拍^カ此^カ家^カの^カ信^カま^カる^カか^カふ^カ平^カ貞^カ文^カの^カ志^カの
ひてしこらひゆてり^カま^カま^カを^カ契^カ得^カける^カ信^カひ^カ女^カ信^カり^カ
賜^カ太^カ政^カ大^カ島^カよ^カび^カり^カ魚^カら^カれ^カて^カわ^カこ^カを^カ信^カお^カら^カれ^カて^カ又^カふ
およそひる^カり^カこ^カく^カ成^カり^カた^カれ^カを^カ信^カお^カら^カれ^カて^カ又^カふ
はうりなる^カり^カ本院^カの^カ西^カ乃^カ對^カにあ^カう^カひ^カあり^カき^カける^カ以^カよ
ひ^カを^カて^カ母^カり^カ見^カせ^カた^カま^カつ^カ連^カと^カて^カり^カひ^カび^カお^カせ^カ付^カ得^カ
ける^カ平^カ貞^カ文^カの^カ信^カひ^カを^カて^カり^カひ^カび^カお^カせ^カ付^カ得^カ

ハツコ^カお^カ契^カし^カ必^カ給^カなり^カらん^カ 現^カま^カく^カこれ^カ契^カり^カあ^カん
定^カけ^カる^カ契^カ得^カる^カ海^カと^カふ^カ我^カを^カま^カれ^カの^カそ
りのま^カる^カと^カま^カよ^カこ^カ子^カれ^カ信^カひ^カを^カ信^カお^カら^カれ^カて^カ又^カふ

我^カハ^カわ^カ連^カと^カ 涉^カ門^カ乃^カ信^カひ^カと^カみ^カゆ^カ 涉^カ門^カ此^カ信^カひ^カを^カ信^カお
信^カ給^カる^カ物^カを^カと^カ思^カは^カる^カと^カ 嗚^カ
私^カ也^カの^カ我^カを^カり^カま^カう^カその^カ討^カに^カま^カあり

涉^カて^カし^カる^カ海^カよ^カま^カる^カ 尚^カ侍^カ退^カ出^カれ^カ聲^カ也^カ
え^カれ^カる^カ 涉^カ門^カ還^カ幸^カあり^カの^カゆ^カら^カり^カ
ち^カう^カま^カ海^カを^カり^カ 近^カ邊^カ大^カお^カ を^カ信^カハ^カち^カう^カま^カり^カ中^カを^カ讀^カり

九^カ幸^カに^カ寄^カ 信^カ製^カ

あ^カら^カら^カま^カお^カく^カけ^カり^カ也^カ ぬ^カら^カら^カま^カの^カ 物^カ也^カ

あしとや 大おを所階ミシのりともわくシヨシ事守モルぬはれ
とがなり

ことなるゆりまに 湯家の事 されと所門乃涉カケテ形と
みてきとがなり 双也

野をたつりーと 所門のほむとみゆ一物をとふると大
おれむと所力もつとて不便ヒシと思ふハ儀也 哢

花子玉のむとありいりー 仍所説も同シ但又哢可シ也
春の聲も意摘にとあり我う聲をたつりーみ一物ねす

りー
さんむいりーのりまをりのふきんとなり
おけりりき 玉れ言を双へふりりそへはなけきともぬを

ゆりを因ゆのふ念りせとの早下ヒゲりり

のゆりみのちうそ 所門乃還カケテ幸也

ふねとそゆらふれ 天子れはゆあー又を源のとのま

と思はてト儀トなる花子大おへこよひわー一ぬ人ど

みこし因 大お因氣とまると

れむーうふ 大おうーのー成ぬるり

ちうれとー 由大長あうひ大おへ乃ゆとがなり

きごい ぬ仕のをヒシ返カケテなりぬむとまると

六葉波 源れヒシ念カケテのふるともなま今ヒシ又カケテいぬくとがなり

とふやーらふり 此のあまれヒシ温カケテ煙カケテ因カケテとらとがなり

とふぬとーいれぬりーらり

とてなり

ありめする事 うちいささきりーるを

もはれうふたえれむろれ本うこくも久しと年哉

包りくる非 昔乃さ留山吹うたのこも悉のよゆき

ぬむらうめやも 暫時サシトキ也スレぬも源と悉スレぬと云方の心丸

引身あきた左サマ 略し

粒あらはハ 悉とまて粒れあうやの座も空の小葉は

乃まうせけう ぬりフル隠むなり

いやしくしを 敬ヤスむる事

玉水丸 ぬやまぬ水の玉あふすさうまきしと事れす

ゆれは水 後と玉あふやうふとむり

さーあしとまて 勝月カサキ親と意イシ居キれとらうとめはひー事よ

つとを今きー何らとらう物思ひとまを

よけうを言 あく西珍くひなり

よけかきまけつま 玉乃しと成るるまじや

あつたあうを 和琴ワコトよすめくまありまへおほし

玉をそあうをう ことたりをゆもあへさおれ糸の池れ

玉もはまのふりうもえ

おひもさうねをまのひらうらうや 因俗上野翁

後漢書ゴカンショ鴨を水の藻モたともおれく袖もやとふりさるま

事なり 玉ものあ ば時とんあう丸玉カウラ鬘とこふ

お時なりし うちれ子の事来しありそあひ 時

清き海なり 双

あめをふれひき 立てたのひれまてそ思ふわきもあめ

あつものふれむよりのあすこぼれ

かきう乃まきひるす 玉の用捨れむ也

あつものあつりしし 源氏の心と思なり

あつひしとあつ心 六条院とむれふおぼるなり

又よ夜と くらなりれ久に衣成候 くらをいそくひし

ゆとさうわりのを

れもくひふあ 中道き玉への西海なり

續古今よと人しす ねりあともこふあもつて

し 心吹の又よむと候てさなき けあつれ又

あらえなりねりひさうやまてれくと結なつての山

吹の花

あつよみもほく 夕あれハあつみ鳴るうけとせれわ

ふにみもほくわすれなくと 雨粒をみゆらなり

まことなまきさう ぶらつくとまな中もつてあなと

るも細いひとりとと思ひ 事乃をやうささひ夜

あつ人のけふあやしたる 双也

あつれ子乃 鴨子 ねととりとももみ言相也

若振もふうまぬす多く 鴨のこい親なり 海と親とす

さそれり

らんじ 鴨子と柑子摺あとの様にまねらるるなり

うらやま... 昭若れ心

壬午十一月 シモツキトヨム 源世八女の十一月也

ミカヅラ 玉鬘男 ヒナ名 韓之乃男 ミシ 子能 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あり十一月れ事 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

ぢりひやうつ ミシ 雙

らくれとも ミシ 内府

わらわの... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

を... 内府

は... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

らくみ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

久... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

あ... 好まき... 内府の女 ミシ 又末の討ふ秋の夕れ奉

るまゝうたてをうたててうらなはるや

たがししと舟

城江あきたなくしと舟あはるるり同し入るや

あつてあつて

あつての屋 夕のひびき也 世のふしやあつてあつて

あつてのやうとなくしと舟あつてあつて

あつてのいふや 舟のあつていふあつてあつて

あつてあつて

あつてあつて 夕あつてあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつて 舟あつてあつてあつてあつて



